



## リサイクルの工程

- ① 従業員の方が動く工場の様子。解体された部品はベルトコンベアーで運ばれ、さらに解体されていく。
- ② 整面と液品を取られた遊技機。この段階からさらに細かい解体が進められる。
- ③ 手作業で部品を分解していくのだが、その早さにビックリ！ この後はパーツごとに選別し管理される。
- ④ 分解されたパチンコ台のハンドル。
- ⑤ パチンコの液品はフォトフレームへ再生される。

**リサイクル率の高さは手作業での解体にあり！**

リサイクルの仕組みを理解したところで、パチンコの解体を行っている国際資源リサイクルセンターに足を運んだ。この工場に働いている従業員の人数は約70人で、運ばれてくる遊技台すべてを、ほとんど手作業で解体する。その数は1日およそ300台にも上り、砕かれたプラスチックなど、解体された部品はそれぞれ分別され、工場内でしっかりと管理される。

遊技台は長年使われて廃棄される電化製品と違い、ホールで稼働する時間が短いため、それぞれの部品の価値が高く、モーター、スピーカー、高価なプラスチックなどが混在している。手作業でしっかりと解体すればなんと約98%がマテリアルリサイクル可能になるそうだ。因みにパチンコの液品はフォトフレームに、木屑は炭となってリサイクルされている。

**リサイクルシステムの仕組みと利点とは!?**

リサイクル工場の活動を説明する前に、リサイクルを行うようになった経緯と仕組みを知っておきたい。

今からさかのぼること9年前の2001年、パチンコ産業の市場規模は約28兆円と言われる中、廃パチンコの野積みが社会問題として浮き彫りになった。この問題は例産した業者やホールなどが原因とされ、町の住人などがボランティアで撤去作業を手伝うという事態にまでなった。そんな中発足されたのが、全国のホール経営者たちが集まったパチンコ・パチスロ研究会であり、現在の遊技機リサイクル協会となっている。そしてその業務を請け負うのは、遊技機リサイクル協会に指定された12社のリサイクル業者である。

ではどんなシステムで運用されているのか。ここで意外と知られていないのが、リサイクル費用を負担しているのは遊技機を製造しているメーカーであることだ。よってメーカーに部品を戻すことが第一となり、少しでもコストを抑えられるように、そして何より処分費用をホールが負担することなくリサイクル業者に買い取ってもらうという利点が生まれる。さらに引き取られた150万台の機体はデータとして保管され、どんなルートで破棄されたかがメーカーで確認することも可能となっている。これは、使用済み遊技台が不正に扱われないようにするといった狙いもあるようだ。

## 社会問題になった野積み



右の写真は2001年に栃木県鹿沼市材木町で野積みされたパチンコを撤去しているところ。台数は約17万台と書かれており、撤去期間に約半年かかった。

# 野積み問題から10年、リサイクルに尽力

## リサイクル工場で見えた業界のECO活動と今後の課題

**リサイクルの現状から見た今後の課題**

リサイクルの仕組みと工場見学でリサイクルを勉強し、改めて必要性和と感さを実感した。

現在、市場に出回る遊技機はパチンコが300万台、スロット台が70万台と回われている。その事実を踏まえて国際資源リサイクルセンターの千田谷社長は、国内のリサイクル率の低さを問題に挙げた。その原因となるのが海外流出で、使用済の遊技台が不正に使われるケースも実際にあり、現状の国内リサイクル率は40%、50%ほどだと語る。今後ECOを推進していくのであれば、今以上に業界が協力すると同時に、リサイクル法などの政策を国が進めていくことが課題になっていく。そんな訳でまだ沢山の宿題が残されているが、この問題を他人事として感じるのではなく、例えばアルバイトやネットポールの運営を集めて、ホールに持ち行くといった個々でも出来ることから始めれば良いのではないだろうか。

**各メーカーもECOを意識**

現在各メーカーもそれぞれ発売した遊技台を回収し、新台製作時に再利用するといったシステムを独自に発表している。今後もECOを意識した新ブランドが生まれる可能性は高いのではないだろうか。

## リサイクルシステムの構造

現在のリサイクルシステムはメーカーとホールの組合が地球環境保全を一番に考え、国内処理を概念として運営されている。そして実になるリサイクルシステムだが、ホールは近隣のリサイクル業者に直接連絡し無料で遊技台が処理できる。一方、リサイクル料金を負担しているメーカーは、希望する部品を優先的にリサイクル業者から受け取ることができる。

